

個体ならざるもの

スピノザ『エチカ』の個体論における最単純物体の概念

真野 雄大

序

本稿は、スピノザ『エチカ』の個体論における、個体 *individuum* の規定に先行しつつそれ自身は個体ではない最単純物体 *corpora simplicissima* の概念の内実と意義を、神による産出の機序および同一性の観点から解明することを目指す。精神の本性と起源を主題とする『エチカ』第2部には、精神を構成する観念の対象たる物体を論ずる、所謂「物体の小論」（以下〈小論〉と呼ぶ）が展開される。そこでは、運動と静止のみによって区別される最単純物体⁽¹⁾が先ず扱われ、次いで、人間身体もそれであるところの複合物体即ち個体が定義される。ただ、その最単純物体の内実⁽²⁾、或いは最単純物体から個体へと進む〈小論〉の議論構成の意味が理解されるには、そこで前提されている最単純物体と個体との差異が、精確に言って何処に存

- 1 デカルト『哲学原理』第二部 25 項（AT VIII-1, 53–54）では、運動に共に与る「同時に運ばれるすべて」として一なる物体が規定される。先ず以て最単純物体は、運動を通じた物体の区別というこうしたデカルト的理説を継承している。但し、デカルトの規定する一物体は、諸部分の多様な運動が許容される点で、その部分が考察されない最単純物体と異なり、また、諸部分の運動伝達の仕方を通じて一物体として定義されるのでない点で、スピノザの個体と異なる。尚、デカルトにおける、量に依拠した個体の同一性、それと区別すべき生命の機能的統一性、魂により個体化される人間の例外的個性性については、Ablondi & Barbone 1994 参照。また〈小論〉を、デカルト自然学の形而上学的基礎からは離反しつつも、数学的定式化でなく因果性を通じた可知性を追求する点でその延長線上にあると読む解釈は、Charrak 2020 参照。
- 2 最単純物体を巡っては、関連テキストの僅少という事情もあり、多様な論点から種々の解釈が提出されてきた。例を挙げれば、アリストテレス自然学における単純物体の伝統に接続する Wolfson 1934、その単純性を、可知性の条件を成す概念上の分析不可能性と解する Adler 1996、最単純物体について、その実在の確証を超えた経験認識の不可能性と、自然学的諸法則を通じた演繹的認識の可能性を指摘する Moreau 1994、相互間での一致と差異の様式の相対的な少なさにその単純性の実質を見る Jaquet 2005、物体の単純／複合の別を考察の文脈に応じて変じ得る相対的区分と見做す Rice 1971 等がある。

するのが見極められねばなるまい。本稿はその差異を、単純と複合の対には尽くされない、同一性の観点から解明することを試みる。最単純物体の個体ならざる所以をそのように問うことは、翻って、個体は何を乗り越えて個体たり得るかという、スピノザの個体把握の一端を照らし出すことにも繋がろう。

また、最単純物体の概念は、最単純物体と有限な個体とを包括した個別者ら（諸個物 *res singulares, particulares*）⁽³⁾ が如何に神により産出されるかという問題圏からも問われ得る。スピノザにおいて、神は必然的に実在する⁽⁴⁾のみならず、必然的に無限に多くのものを無限に多くの仕方でも産出する⁽⁵⁾。だが、後者の産出の必然性には、実在の必然性に見出されぬ固有の問題、つまり個別者らの産出の機序を巡る問題が伴う。即ち、神のうちにはその絶対的本性から無限様態こそが産出される⁽⁶⁾ならば、有限である個別者らは、無限なる神において如何にして産出されるか。成程、個別者が実在するなら、それは、他の個別者に変状する限りの神によって実在へと規定されることを通じて以外ではない⁽⁷⁾。だが、そもそもそれら有限者が無限者においてどう生ずるかという、神による個物産出の理路に関わる問題は依然残る。本稿は、最単純物体の内実および意義を、延長属性下における神的産出の問題⁽⁸⁾の論脈に〈小論〉を定位させながら検討したい。それにより、最単純物体の個体に対する先行は、単なる定義上の先行に留まらぬ、神による個体産出を可能ならしめる先行として照明されることとなろう⁽⁹⁾。またその検討は、神による有限な延長の諸事物の産出が如何に非個体的契機を要するのかを、併せて示すことになるだろう。

かくの如き問題設定に従い、本論は以下の構成をとる。1節では、無限な延長に

3 最単純物体と有限個体は共に個物である。物体は、延長する事物である限りの神の力能を一定の仕方でも表現する様態であり（E2Def1）、かかる様態は個物である（E1P25C）。故に最単純物体は、個体ではないが個物である。他方、個物は有限性を含意する為（E2Def7）、「全体としての自然」なる無限個体（E2L7S）だけは、個体だが個物でない。

4 Cf. E1P11

5 Cf. E1P16

6 Cf. E1P21–23

7 Cf. E1P28

8 神による産出の問題を、殊に延長属性に関して問い尋ねたチルンハウスに対し、晩年のスピノザは、未だそれを順序立てて整理できていないと応えている（Cf. Ep80–83）。

9 運動と静止、最単純物体、諸個体の系列を、神的延長からの産出過程に位置付ける読解の大枠は、Matheron 1969, Ch. 1–3 参照。本稿もこの大枠においては彼の読みを継承するものである。

おける最単純物体の成立機序を分析しつつ、〈小論〉を神的産出の理路に位置付けることの妥当性を検討することで、最単純物体の内実と意義を考察する。2節では、最単純物体の同一性を主題とし、その同一性の原理が、実在の延長にあっては当の同一性の喪失を導くという逆説的性格を剔出する。3節では、個体との対照を通じ、最単純物体の非個性性をこの逆説性に、個体の個性性をその逆説性の乗り越えに、それぞれ見定める。総じて本論は、神的延長からの産出が、己の同一性の喪失へ向かう個体ならざる最単純物体を基層に据えざるを得ないにも拘わらず、否寧ろその層を介してこそ、同一性を維持しつつ実在するところの諸個体が産出され得るという、その屈折を孕んだ理路を闡明してゆくことになる。

1. 最単純物体の成立機序と延長属性下における個物産出の理路

〈小論〉はその冒頭において、諸物体相互が何により区別されるかを論ずる。「諸物体は、運動と静止の観点、速さと遅さの観点で区別され、実体の観点で区別されるのではない」(E2L1)。物体は神＝実体の本質を構成する延長属性の様態である⁽¹⁰⁾から、実体つまり延長の観点では区別されない。そこで、運動と静止の観点で区別される物体のうち、運動と静止、速さと遅さのみによって区別されるのが、最単純物体である⁽¹¹⁾。

最単純物体を相互に区別せしめるのは如何なる区別か。延長は、他の神的属性と同様、多数の実体へと分割され得ない⁽¹²⁾。だが延長に何らの別をも認め得ぬものもない。諸実体への分割を排拒した延長においても成立し得るのが、事象的区別 *distinctio realis* ならぬ様態的区別 *distinctio modalis* である⁽¹³⁾。最単純物体相互の区別は、運動と静止という様態を通じた、延長属性下での様態的区別であると言える。

ここに看取すべきは、運動と静止が最単純物体に先行する点である。もし運動と静止のみによって区別されるはずの最単純物体が、運動と静止に先立って存立しているならば、それらが何により相互に区別されるのかが不明となろう。故に、既に区別されてある諸物体が運動・静止するのでなく、寧ろ先行する運動と静止こそが、運動・静止するところの最単純物体を相互に区別し存立せしめるのである。か

10 Cf. E2Def1

11 Cf. 〈小論〉内の Def 直前の A2 への付言

12 Cf. E1P12, 13, 13C

13 Cf. E1P15S

ように、運動と静止という様態の先行が、延長の不可分性に抵触しない形で、最単純物体なる個別者の成立を可能にしている。

無限分割可能性の観点から、更にこの区別の性格を検討しよう。諸実体へと分割し得ない延長は、何らの空虚も孕まぬ全き連続体であり、故に様態の水準では無限に分割可能である⁽¹⁴⁾。だが最単純物体間の区別は、かくの如き分割可能性の問題圏には属しないと見るべきである。というのは、最単純物体は、有限大の物体の分割を通じて規定されるのではない。そもそも如何に有限大の諸物体が存立するかを問う〈小論〉の行論からして、有限大の物体を前提し得なからう。また、無限を半分、更に半分と分割して見出されるのでもない。無限の半分への分割は矛盾なく遂行し得ぬからだ⁽¹⁵⁾。故に、運動と静止のみによる最単純物体の様態的区別は、有限大の物体の前提抜きに、無限延長において成立するものとして、分割の可否を問う問題圏とは異なる論脈に属する。

本論の見るところ、最単純物体相互の区別は、半分にすべき全体の前提無しに、運動という事象が延長において周囲・近傍との関係で起こる、その局所性に拠って成立する。即ちそれは、無限な延長における、先行する有限者を前提しない、寧ろそれを通じて初めて個別者が存立してくるところの、運動と静止、速さと遅さのみによる、周囲からの局所的差異化としての区別である。成程、かくて存立する最単純物体は、有限大の大きさを持つだろうし⁽¹⁶⁾、故にそれが分割可能かを敢えて問えば、可能だと答え得よう。この限りで最単純物体の単純性は、分割の意でなく運動の意での単純性だと言い得る⁽¹⁷⁾。然れども、何より理解されるべきは、最単純物体

14 Cf. Gueroult 1968, 510–11. ゲルーは、延長実体の不可分性が延長の連続性を根拠付け、後者が様態の無限分割可能性を担保するという根拠連関を再構成する。この無限分割可能性の故に、その本性からして分割不可能なる原子は容認され得ない (Cf. E1P15S)。

15 Cf. E1P15S. 諸実体への分割を念頭に置くその議論は、無限に分割を認めれば無限に大小を認める矛盾に陥ると論ずる。但し、Ep12は、あらゆる指定可能な数を超えるが故の無限ないし無際限にであれば、大小を矛盾無く認め得るとする。

16 ドゥルーズは最単純物体を、大きさを欠く点と有限大との間の、無限小の物体と解し、個体の本質を表現する関係 ratio の下に、無限小の最単純諸物体が無限に多く集まることで、有限大の個体が実在するに至るとする (cf. Deleuze 1968, 183–93; 2024, 332–48)。だが、最単純物体を大きさと分割の観点から捉える点で問題적である他、最単純物体からの個体複合と諸個体からの個体複合との間にスピノザ自身が見ていない本性上の違いを齎す為に、本稿はそうした解釈を採り得まいと考える。

17 メレオロジー的単純性と運動的単純性を弁別し、最単純物体の単純性を後者に存すると見る読解は、Harmon 2025 参照。

が、そうした更なる分割の可否を問うのとは異なる場で規定される点である。

さて、かくの如き最単純物体の成立を踏まえ、個体はどう定義されてゆくか。運動と静止は、1/ 最単純物体という個別者を成立させつつ、2/ その個別者を運動・静止させて他の物体との因果関係へ不可避免的に参入させ、3/ その因果関係において相互間で伝達される。即ち運動と静止は、因果関係の項の成立、因果関係の生起、因果関係における実質を担い、延長における個別者間の他による因果決定の無限連鎖を成立させると言える。E2L3 曰く「運動ないし静止している物体は、他の物体から運動ないし静止へ決定されたのでなければならず、同様にこの物体も運動ないし静止へ他から決定されていたのであり、そしてこれも他から、と無限に続く」。

この最単純物体間の因果連鎖を前提に、個体は定義される。

同じ或いは異なる大きさの幾つかの諸物体がそれ以外のものどもにより取り囲まれることで、相互に寄りかかるようになっている時、或いはもしそれら諸物体が同じまたは異なる速さの度合いで運動しているなら、それらが自己の運動を相互に或る一定の関係 ratio において伝達するようになっている時、それら諸物体は相互に合一していると我々は言い、そしてそれら一切が同時に一つの物体ないし個体を複合していると言う。この一つの物体ないし個体はそれ以外のものどもから、これら諸物体の合一により区別される。(E2P13Def)

即ち、他の諸物体に囲まれた一群の諸物体が、相互に寄りかかって静止し、或いは相互間で己の運動を一定の関係 ratio において伝達するところに、かかる関係 ratio により規定された諸物体の合一、そして一個体が存立し、個体は関係 ratio に依拠した合一を以て他から区別される。また、かくて成立する個体も同様に、他と因果関係を結び、部分として上位の個体を複合し得る⁽¹⁸⁾。故に、運動と静止のみを通じて最単純物体が相互に区別され、同時に運動を伝達し合う因果関係が形成されれば、そこから最単純物体から成る個体へ⁽¹⁹⁾、更にそれら個体を部分とする上位個体

18 Cf. E2L7S

19 マシユレは、最単純物体を理念的に抽象された幾何学的点として捉え、点からの大きさの複合不可能、複合物から点への到達不可能を理由に、最単純物体の層と個体の層との分断を結論する (cf. Macherey 1997, 142-43)。だが、スピノザ自身が最単純物体からの個体複合を論ずる以上、二層の分断を齎す点解釈は採り得ない。

へと一続きに辿られ得、ここに個体の一切が定義される。

ところで、運動と静止は、延長の直接無限様態である。即ち、神の絶対的本性から帰結する永遠無限の様態である無限様態は、その本性から直に帰結する直接無限様態と、後者から帰結する間接無限様態とに区分される⁽²⁰⁾。何が無限様態であるかを書簡で問われたスピノザが、延長の直接無限様態として運動と静止を挙げる⁽²¹⁾通り、無限の延長には、先ず以て運動と静止が産出される。然るに、最単純物体は運動と静止のみにより区別される。故に、延長において直に帰結される運動と静止から、最単純物体が局所的差異化の形で即座に存立すると言い得る。そして最単純物体間の因果関係に依拠し、諸個体の存立まで辿り得るのだった。かくて、〈小論〉が神的産出の機序のうちに定位されることで、無限なる延長属性からの、最単純物体と有限個体とを併せたあらゆる個物の産出の理路が、見定められるに至る。

対照のため『短論文』に付言すれば、この初期著作においても、神は延長の普遍的様態として運動と静止を直接に与え⁽²²⁾、また個物は一定の運動と静止の比 *proportie* として定義される⁽²³⁾。だがそこには最単純物体概念が欠落しているが為、普遍的様態たる運動と静止から如何にして個別的な一定の比としての個物が生ずるのか、その筋道は不明に留まると言える。『エチカ』において確立を見た、運動と静止のみにより区別され、個体の定義が依拠する諸物体の因果連鎖を与える最単純物体の概念は、故に、無限から個別者らへの転換を媒介する、延長における神的産出の理路において不可欠な概念装置である。

最後に、〈小論〉を神による産出の理路に位置付けることの妥当性を確かめたい。成程〈小論〉は神からの運動と静止の産出を語らず、神への明示的言及を欠く。だが、最単純物体の因果連鎖を論ずる E2L3 が依拠する E1P28 は、個物間の因果連鎖を、他の事物に変状する限りでの神の因果的力能の展開として捉え返す定理である⁽²⁴⁾。故に、諸物体間に成立し、それに拠って個体が定義される〈小論〉の因果は、延長属性の個物間における神的力能の展開に他ならない。

加えて〈小論〉は無[・]限の延長を一貫して前提としていると見るべきである。同じ

20 Cf. E1P21-23

21 Cf. Ep64

22 Cf. KV1/9, 1

23 Cf. KV2/VR, no2, Adn8-14

24 個物は「有限であり限定された実在をもつ変様に様態化されている限りの神ないし神の何らかの属性」から、実在し作動するよう決定される (E1P28D)。

E2L3 が物体間の因果の無限連鎖を定立する点、個体定義が個体の成立条件として他の諸物体からの取り囲みに言及する点、また E2L7S が、諸部分からの複合の段階を入れ子状に進んだ先に「全体としての自然」なる無限個体を見出す点は、〈小論〉の背景に常に無限の延長が据えられていることの証左だろう⁽²⁵⁾。更に既述の如く、運動と静止のみを通じた様態的区別は、近傍からの差異化という、無限な延長の下で成立し得る類いの区別だった。かくて神の力能や延長の無限が〈小論〉の底流を成すのであり、そこで構築される諸概念は、神的延長における産出の理路に、正当にも位置付け得る。

以上本節では、最単純物体が、無限なる延長において、運動と静止のみによる局所的な差異化を通じて成立することを見た。また、この運動と静止は延長の直接無限様態である以上、最単純物体は、神的延長からの産出機序において、先ず以て不可避免的に齎される。そして最単純物体同士の因果関係と運動伝達に依拠して個体が定義される限り、最単純物体は、神による延長の諸個物の産出機序にとり不可欠な概念である。次節では、かかる仕方での個体の産出を媒介する最単純物体を、同一性の側面から更に考察したい。

2. 最単純物体の同一性とその逆説的性格

最単純物体の同一性の原理は何に存するか。ここで同一性の原理とは、或る物がその同一を以て同一と言われ、その変質を以てその同一性を失うと言われるところのものとする。スピノザはこの点を明言していないが、運動と静止が最単純物体に先行し、そのみにより最単純物体が区別され存立するという前節で見た機序を手掛かりに、分析を試みる。

先ず、所謂慣性法則として解され得る運動事象を巡る議論に基づき、運動と静止の本性を確かめる。そこでは、運動・静止する物体の考察を通じ、己と他、同一と変化といった基礎的概念が同時に擱まれていると言えるからである⁽²⁶⁾。E2L3 曰く、

25 〈小論〉を、神的力能の捨象された有限者の視点からの論述と見た上で、E2L7S における無限個体が見出される地点に、〈小論〉の水準から無限なる神の力能の水準への転位の不可避性を読む解釈として、Gueroult 1974, 185–89 参照。

26 他を捨象して対象をそれだけで考察することを通じて対象の自己破壊不可能性を結論する、自己保存の力能を導出する議論の一段階（E3P4D）との同型性を踏まえつつ、所謂慣性法則の立論を、最単純物体の同一性の所在とその自己保存的性格とを把握せしめる議論として読む方向性は、Garber 1994 参照。

或る物体は、運動ないし静止する他の物体から運動ないし静止に決定される。この他による決定の必然性から、「運動している物体は、他の物体から静止へと決定されるまで運動し続け、同様に静止している物体も、他の物体から運動へと決定されるまで静止し続ける」ことが導出される。何故なら、他の諸物体には注目せず、静止ないし運動する物体のみに注視する *attendere* なら、そこから静止ないし運動以外は帰結され得ぬからだ⁽²⁷⁾。運動・静止の変化は必ず他に由因する。

こうした当の物体のみへの注視と他の度外視を通じて、同じ運動・静止のみを齎すという運動・静止の本性が概念される。即ち、或る運動・静止それ自身からは、他でもなくその速さと方向⁽²⁸⁾での運動・静止のみが帰結される。またここに、運動と静止の同一性の在処も把握されよう。即ち運動の同一は、その運動の他でもないその速さと方向に存する。かくて運動・静止は、他を度外視する限り同じ運動・静止のみが帰結される、自己維持的な事象である。

ところで最単純物体は、かかる運動と静止のみにより区別され存立するのだった。故に最単純物体の同一性は、運動・静止の同一性をその原理とすると可言。即ちそれは、最単純物体を区別せしめるところの、運動・静止の同一を以て説明される。また最単純物体は、己自身からは同じ仕方での運動のみが、即ち己の同一性の保持が帰結され、決して己の破壊が帰結されず、この意味で自己維持的である。もし外的物体により或る最単純物体の速さや方向が変ずるなら、その最単純物体は同一性を失い、同時に、その新たな自己の運動のみをそれ自身から帰結する別の最単純物体が生ずる。このように最単純物体は、自己維持的な運動的事象をその同一性の原理に据える形で、一個の個物として他から区別され存立するのである。

だが、最単純物体の同一性の原理たる運動・静止には、この自己維持性と拮抗する別の相貌がある。確かに外的物体を捨象する場合、運動・静止はそれ自体から決して変質を生じず、この意味で運動・静止も最単純物体も自己維持的である。然るに実在の延長においては、最単純物体は常に他の諸物体に取り囲まれている。そこにあって運動と静止は、前節で見た如く、2/ 物体同士の因果関係の発生契機であり、3/ その因果関係において伝達・変容されるところの実質である。

かくの如き運動と静止を同一性の原理とする最単純物体は、他の諸物体の捨象されない、何らの空虚無き実在の延長においては、その同一性の原理それ自体に由因

27 Cf. E2L3C

28 『デカルトの哲学原理』における、直線運動、即ち同じ方向への運動の基礎性を主張する議論は、PPC2P15 参照。

して当の同一性を喪失することになる。即ち、2/ 運動と静止それ自体が物体間の因果を惹起する契機である以上、最単純物体は己を成立せしめるその運動と静止の故に、他の諸物体との因果関係に不可避的に入る。同時に 3/ その因果は運動を伝達し合う過程だから、その不可避的な因果関係にあつて運動は変じ、かくて当の最単純物体はその同一性を失う。

以上の如く、運動と静止なる同一性の原理は、他を捨象して見出される、自己維持的な本性を最単純物体に与えつつ、他との関係が捨象されぬ実在の延長においては、当の最単純物体自身の変質を帰結せしめる。換言すれば、最単純物体の層には、単に偶有的にでなく己の同一性の原理自体に由因して、己の同一性の喪失へ向かう物体の領域が披けている⁽²⁹⁾。この逆説的性格は、一方では運動が自身からはその同じ運動のみを帰結する自己維持的な本性をもちつつ、他方では運動が他との因果を生起させる契機であり且つその因果の実質として伝達・変容されるという、運動の二重性に由る。この故に、実在にあつて最単純物体は自ら異なるものになることへ向かうのである。

こうした読みに対しては、だが、次の如きゲルーからの反論があり得る。即ち、「各物体は或る時にはより遅く、また或る時にはより速く運動する」(E2L1 直前の A1)、「一つの同じ物体が、動かす諸物体の本性の異なるに応じて異なる仕方で動かされる」(E2L3 後の A2) 等の、〈小論〉における最単純物体を対象とした議論は、運動・静止の変化を経ても存続する同一の主体 *sujet* 無しには成立しなからう。彼はこの同一主体を確保すべく、最単純物体を単振り子に喩え、質量や運動の大きさを変じてでも保たれ得る固有の振動運動をその同一性の原理に据える⁽³⁰⁾。しかし、或る物体が「物体 A」⁽³¹⁾ と名指されて連続的に考察されることは、当物体が同一であり続けることを含意しない。変質して同一性を失う物体も、なお連続的考察の対

29 マトゥロンもまた最単純物体について、直線運動を妨げる渦動を理由に、その要素的個性を一瞬、或いは殆ど一瞬しか保持しないと見る (cf. Matheron 1969, 27–28)。デカルト自身、延長の充満性と直線運動の基礎性とを根拠に、衝突の不可避と不斷の変化 *continua mutatio* を結論する (AT VIII-1, 66)。尤もデカルトの場合、物体自身の変化でなく物体の性質の変化こそが考察対象であり、またその主眼は、衝突時の運動保存に証示される神の不変性に置かれる。尚、〈小論〉における渦動運動への言及の消失については、Charrak 2020, 633 参照。

30 Cf. Gueroult 1974, 158–60

31 「物体 A」の語は E2L3C で使用される。

象たり得る⁽³²⁾。故に最単純物体の同一性は、他の原理を外挿せず、連続的考察の背後で絶えず変じ得るような運動と静止の同一性によって専ら説明されるべきである⁽³³⁾。先立つ運動と静止を通じて規定される最単純物体の概念は、不変の同一主体を想定しようとする発想を斥ける。

また、最単純物体は「その速さがそれらの絶えず受ける衝撃や運動によって瞬間毎に変化」し「最初の衝撃で消滅する」からとて、ゲルーの懸念する如く「固有の事象性を欠く」「幻想的な」ものとはなるまい⁽³⁴⁾。というのは、「或る物体が他の物体から変状される仕方はみな、変状される物体の本性と同時に変状させる物体の本性とから帰結する」(E2L3 後の A1)。即ち、最単純物体は、他との因果関係により同一性を失う際に、その喪失の仕方を部分的に規定する。つまり最単純物体は、己が己で無くなる仕方を規定する形で、その本性を確かに発揮する。故に、その本性からして変質へ向かう強い可滅性が見出されるからとて、最単純物体は固有の事象性を剥奪されるわけではない。

以上本節では、最単純物体が、それ自身だけで見れば同じそれ自身を帰結するところの運動・静止を、区別の原理とすると同時に同一性の原理ともすることを見た。だが、他を捨象し得ぬ実在の延長においては、この同一性の原理そのものが、他との因果関係を惹起しながらそこで伝達されることで、当の最単純物体の同一性の喪失を帰結せしめる。故に前節で見た神的延長による個物産出の理路は、己の本性からして己の変質へ向かう存在者の層を、不可避的に孕まねばならぬ。次節では、かかる最単純物体と個体とを同一性の観点から対照することで、両者の差異の所在を見極めたい。

3. 最単純物体と個体の差異：同一性の観点から

本来区別されるべき概念を同一視し、或いは一方を他方に解消する時、何処まで

32 ゲルーの主張の論拠とされていた A1 は、速さが不可変であることを否定する公理と解し得る。A2 もまた、最単純物体が関係を結ぶ相手の異なるに応じて異なる仕方で変質し得るとする公理として読み得る。

33 同一主体の要請というゲルーの読みを引き受け、区別の原理と同一性の原理とを弁別し、後者を運動・静止にでなく大きさと形の同一に求める Messeri 1984 の読みにも、従って本稿は反対する。

34 Cf. Gueroult 1974, 158. ゲルーの懸念は、リヴォーによる最単純物体論 (cf. Rivaud 1924, 29-37) を受けてのものである。

が両者に共通した何こそが片方のみに固有であるかが不分明となり、以て一方の概念のみならず両概念が共々損なわれる。スピノザ自身が個体から区別している最単純物体を個体の一種と見做す⁽³⁵⁾際にも、同様の混乱が招来されよう。最単純物体と個体の差異が、精確に言って何処に在りまた何処には無いかを、前節の議論を継ぎ、同一性の観点から見定めてゆこう。

まず、個体の同一性の原理は、他からの区別の原理と同じく、諸部分間の運動伝達の関係 ratio に存する⁽³⁶⁾。この関係 ratio は、諸物体が単に因果関係を結んでいる事態を指すに留まらず、その異同を問い得る。かくて、他でもない一定の関係 ratio での運動伝達が諸物体間で維持される限り、それにより定義される一個体は同一性を維持し、その関係 ratio が変質すれば個体はその同一性を失って破壊される。他からの区別の原理であるものがそのまま同一性の原理である点、また専ら運動的事象を以て同一性が規定される点は、最単純物体と個体とで共通する。

また、諸部分間の関係 ratio は、それ自身から破壊が帰結されない。事物の自己破壊不可能を定立する E3P4 が論ずる通り、或る事物だけに注視し *attendere* て外的原因を度外視するなら、その事物を破壊し得るものは何も見出し得ぬが、その理由は、事物の定義がその事物の本質を肯定し、決して否定しない点にある。ところで、専ら肯定されるその本質は、複合物体たる個体の場合、その個体をそれとして規定する関係 ratio に存しよう⁽³⁷⁾。故に、或る個体をその個体たらしめる一定の関係 ratio からは、それ自身の破壊が帰結されない。その関係 ratio の破壊は常にその外部に由るのであり、諸部分がその関係 ratio で運動伝達すること自体からは、寧ろその同じ関係 ratio での運動伝達が帰結しよう⁽³⁸⁾。周囲の捨象を経て把握されるこの自己維持的本性もまた、最単純物体と個体とに共通する。即ち両者は、それだけで考察するならば同じそれ自身の維持のみが必ず帰結してくる運動的事象を、その区別と同一性の原理とする。

だがそれに留まらず、個体は、周囲を捨象せずともその同一性が維持され得る。

35 例えばマトゥロンは最単純物体を、部分の数が1の個体であると解する (cf. Matheron 1969, 27-28; 42; 51)。

36 Cf. E2L4-7

37 本質と関係 ratio の概念的繋がりとは、E2P24D (「人間身体を複合する諸部分がその身体の本質に属するのは、その諸部分が或る一定の関係 ratio において己の運動を相互に伝達する限りにおいてのみであり (…)」) に看取される。

38 マトゥロンは、個体の諸部分間の関係を、諸部分がその関係に従って運動を伝達しその同じ関係を再生産する閉じた系として捉える (cf. Matheron 1969, 43)。

即ち、實在にあっては、個体もまた常に周囲との関係の内に置かれ、その全体や諸部分は、外的諸物体と運動を伝達し合う。然るに、最単純物体と異なり、個体の同一性は、そこで伝達され変ずる運動それ自体には抛らず、寧ろ、諸部分がそうした運動をそれによって伝達するところの、諸部分間の関係 ratio に抛るのだった。故に、個体を定義する一定の関係 ratio は、絶えざる運動の伝達と変容を通じても確かに維持され得る類いのものである。かくて、最単純物体と異なり、同一性の原理を成す事象がその破壊へと投身する機序は、個体には見出されない。

以上からすれば、他から区別された一個の規定されたものとしての個性性は、個体性に固有でない。最単純物体もまた、他からそれとして区別され、或る一定の運動と静止を以て規定された本性をもつ。また、自己維持的な本性も、個体性に固有でない。個体であれ最単純物体であれ、周囲を捨象して考察すれば、それからは自身の維持のみが帰結される。最単純物体を個体の一種と見做すことは、両者に共通する諸特徴を個体固有のものとして取り違えることであり、そこでは最単純物体にしか属さぬ特徴が被覆され、何こそが個体にしか属さぬかも見落とされよう。

個体ならざる最単純物体の固有性は、實在の延長において、その同一性の原理からして自身の変質に向かうその逆説的性格に存する。対して最単純物体ならざる個体の固有性は、その同一性の原理が、實在における諸物体同士の因果関係内でも維持され得る事象である点に存する。両者は共に、その破壊が由来する外部に常に晒されつつ、その可滅性には単なる程度の差以上の差がある。成程両者とも自己維持的な本性を有するが、最単純物体は、その同じ本性が同時にそれ自身を変質へと向かわせる一方、個体の場合、その本性はそうした変質へ向かう機序を解消しているからである。この相対立する性質を見定めれば、最単純物体を個体の一種とは見做し得まい。

最後に、以上の読解に伴い得る問題を考察したい。即ち、實在にあってそれ自身の破壊に向かう最単純諸物体の層から、それ自身の維持を實在においても遂げ得る一階の個体の層が、如何に成立するのか。手掛かりは、個体の部分の交換可能性を論ずる E2L4 に求め得よう。E2L4 曰く、「非常に多くの諸物体から複合される物体ないし個体から、幾らかの諸物体が分離され、同時に、それらと同じ本性を有する、同じだけの他の諸物体がその場を引き継ぐなら、個体は自身の形相の変化無しにそれまで通り己の本性を保持するだろう」。別個の諸物体が或る個体の部分として「同じ本性」を持つと言われているからして、ここで同じ本性とは、当の個体を定義する運動伝達の関係 ratio の一角を代わって担い得ることを意味していよう。

故に、どんな異なる諸物体でも代置可能であり同一の本性をもつのではないにしても⁽³⁹⁾、個体を定義する関係 ratio に依拠した、諸物体間の差異の捨象が作動する。即ち、或る一物体のそれとしての同一性と、上位の個体の部分としての同一性は弁別され得る。

この弁別に基づけば、最単純物体が絶えずそれ自体としての同一性を失おうと、その喪失に際して新たに生ずる別の最単純物体との差異が捨象され得る限りで、上位個体の部分としての同一性は保持され得る。最単純物体の差異の捨象の例としては、或る一定の方向や速さの連続的帯域に収まるものをすべて同一とする場合等が考案できよう。絶えず変質する最単純諸物体の差異が一定の仕方で捨象される形で、諸部分の本性の同一を保って個体としての同一性を維持する層が成立し得る。ここに改めて、神的延長属性から直接無限様態と最単純物体を経て諸個体の産出に至る筋道が確かめられる。

結

以上、個体の成立に先行するところの個体ならざる最単純物体について、その内実と意義を、神的産出の機序および同一性の観点から論及してきた。最単純物体は、運動と静止のみにより区別されるものとして、神的延長からの諸個物の産出の理路にとり不可避にして不可欠の基層を成す。だが、その同一性の原理たる運動・静止は、実在の延長においては、最単純物体自身の同一性の喪失を帰結する。対して個体は、諸部分間の運動伝達の関係 ratio をその同一性の原理とすることで、最単純物体の個体ならざる所以を成す当の逆説を乗り越える。要言するに、神的延長からの産出は、その基層において、それ自身の同一性の喪失に向かう個体ならざるものを齎す他ないが、にも拘わらず、否寧ろこの層に拠ってこそ、同一性を維持しつつ実在する諸個体を齎すことが可能となる。そして現に我々自身もまた、一個の個体として、かかる屈折を孕んだ理路を通じて神から産出され、自らを維持しつつ実在しているのである。

本稿で確認された如く、『エチカ』において最単純物体や個体は、専ら運動的事象に拠って規定される。これは例えば、主語－述語構造を範型に、識別可能性の

39 故に、最単純物体は固有の同一性を問われないとする読解 (cf. Macherey 1997, 147) も採り得ない。或る一階の個体の部分たり得るかは、その個体の関係 ratio によって制約され、その制約は、最単純物体にそれとしての同一性を前提として要請するからだ。

観点から個体とその同一性を捉えんとする発想とは、大いに異なろう。では、こうした言わば思考の外部における延長の理のみに依拠して個を捉える思考は、識別の観点から個を概念せんとする我々の個や普遍をめぐる思考に対して、如何なる批判的意義を有するか。この問いを今後の探求課題とし、稿を閉じたい。

一次文献

- Descartes, René. *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery. Vrin, 1964–74 (11 vol.). [AT の記号と巻、頁数を以て指示する]
- Spinoza, Baruch de. *Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften herausgegeben von Carl Gebhardt. C. Winter, 1925 (4 vol.). [参照指示の方式は *Studia Spinozana* の citation conventions に従う]

二次文献

- Abbondi, Frederick, and Steve Barbone. 1994. “Individual Identity in Descartes and Spinoza.” *Studia Spinozana* 10: 69–91.
- Adler, Jacob. 1996. “Spinoza’s Physical Philosophy.” *Archiv für Geschichte der Philosophie* 78 (3): 253–76.
- Charrak, André. 2020. “Sur l’abrégé de physique de l’Éthique.” In *Spinoza Œuvres IV. Ethica. Éthique*, édition publiée sous la direction de Pierre-François Moreau. PUF.
- Deleuze, Gilles. 1968. *Spinoza et le problème de l’expression*. Éditions de Minuit.
- . 2024. *Sur Spinoza: cours novembre 1980–mars 1981*. Édition préparée par David Lapoujade. Éditions de Minuit.
- Garber, Daniel. 1994. “Descartes and Spinoza on Persistence and Conatus.” *Studia Spinozana* 10: 43–67.
- Gueroult, Martial. 1968. *Spinoza. I: Dieu*. Olms.
- . 1974. *Spinoza. II: L’âme*. Olms.
- Harmon, David. 2025. “Spinoza’s Simplest Bodies.” *Philosophy* 100 (1): 105–29.
- Jaquet, Chantal. 2005. *Les expressions de la puissance d’agir chez Spinoza*. Éditions de la Sorbonne.
- Macherey, Pierre. 1997. *Introduction à l’Éthique de Spinoza. La deuxième partie: la réalité mentale*. PUF.
- Matheron, Alexandre. 1969. *Individu et communauté chez Spinoza*. Éditions de Minuit.

- Messori, Marco. 1984. “Il corpo singolo nella teoria fisica della materia di Spinoza ed in quella di Descartes.” *Annali della Scuola Normale Superiore di Pisa. Classe di Lettere e Filosofia* 14 (2): 771–95.
- Moreau, Pierre-François. 1994. *Spinoza: l'expérience et l'éternité*. PUF.
- Rice, Lee C. 1971. “Spinoza on Individuation.” *Monist* 55 (4): 640–59.
- Rivaud, Albert. 1924. “La physique de Spinoza.” *Chronicon Spinozanum* 4: 24–57.
- Wolfson, Harry Austryn. 1934. *The Philosophy of Spinoza*. Vol. 2. Harvard University Press.